

動力 画レタ ーの地 獄

園田大造



始めに

例の如くにご挨拶申し上げます。作者の園田大造です。この度は拙作をお買いいただき、お礼申し上げますが、この作品はほぼ残虐な表現からなっておりますので。苦手な方は今からでも遅くはありませんので、読むのは思い止まってください。

さてごく初期の即品の焼き直しで、とある国の日本大使の令嬢が誘拐され、ごく普通の一般人、ただし変態サディストではある私のもとに、何と三億ドルもの身代金の要求とともにこの日本大使令嬢の残虐無惨な拷問シーンを録画したCDが送られてきて、それもなぜか次々に送られてくる、しかも日本中のサディストたちに送られてくるといった内容です。もしこんな事があつたらいくら変態でもさぞかし戸惑うだろうし、それに嬉しいかもしれないが素直に喜べないな、でも結局楽しんでいて、とは言え無意味にこんな事がされる訳がなく…、と言ったお話です。

ともあれ楽しんでいただければ、作者としてこれに勝る喜びはありません。

作者敬白

一、ガバ・ブナグルテ共和国の諸相	2P	十三、豚の後の広場の無残	200P
二、最初はじわじわ裸に	5P	十四、人質はいよいよ悲惨	219P
三、最初は徹底的に鞭	23P	十五、その悲惨な言葉を守って	223P
四、そして残酷に苛み始める	42P	十六、さらに激しく破壊する	241P
五、必死で抗うものの屈服	60P	十七、益々苛烈なのだが	260P
六、ただ犯すのも芸がなくて	78P	十八、もちろん最後は人食い蟻	278P
七、いきなり口を徹底して鍛える	96P	十九、これは神慮遠望と…	297P
八、色々と鍛えてみる	113P	二十、最後の動画は予期した以上	300P
九、焦らせて屈服させて調教	130P		
十、奴隷の印は街の広場で	148P		
十一、こんなものとやらされて	166P		
十二、凌辱も過激にしてさらに	182P		

一、ガバ・ブンナグルテ共和国の諸相

ガバ・ブンナグルテ共和国は中南米のどこかにある小共和国で人口は五百万余り、国土は北海道の三倍程度、ほぼ高原地帯の内陸国で主要産業は農業と牧畜、首都は人口五十万程度のドツクドで政治と文化の中心になっているが、他にめばしい都市もない、ついでに言えば目立った絶景も、アステカやインダスなどのかつての文明とも何の関係もないから世界遺産もないし、内陸国だが高原でもないからリゾートなんかかなり様もないとい、むしろここまで何もなければ逆にそれで売り出せるのではないかと思えるほどに何もない、どこからどう見てもどうと言う事のない小国だった。この地域の国家にありがちな政治的な混乱のさなかにある。そもそも共和国と言うからには選挙により大統領が選ばれて国政にあたるはずだが、国家の北四分の一を占めるケドリバス地方に盤踞してほぼ独立国の体裁さえとっているケドリバス民族解放戦線の存在に大統領のウデマグラ・ヒザバグナが非常事態宣言と戒厳令を発令して、本来任期は四年で二期までのはずが、大統領選挙が行われなくなってもう十五年になると言った有様で、ただしケドリバス民族解放戦線の存在も含めて、このあたりの国々においてはそんなに珍しい事ではなく、取り立てて産業もなければ経済力もないし、ましてこんな国がどうなるうが世界の情勢に変化はないし、またこんな国を侵略した処で大したうまみもある訳がなく、例え何が起ころうが、国際的な関心もほとんど払われてはいないのが現状だった。

しかも北部ケドリバス地方に盤踞しているケドリバス民族解放戦線はこの辺りの中心都市、人口七万ほどのドツイタレに司令部を置いて司令官ルシカ・ルシモルノカを実質的に首長として地域を占拠して実効支配はしているのだが、農業と畜産が主要産業で適度に産地があつて水資源も豊かで電力も水力で賄えるから基本的に自活でき、まあ石油や肴が食べなくなったら他の国に頼らねばならないがこれは通常の商取引で対応できるから、よくありがちなどこかほかの国の支援によるのではなくて地域に居住している農民たちからの税金により組織を維持していて、まあこの地域のこういった組織の常としてコカインなどの違法薬物の生成と輸出には手を染めてはいるのだが、これにしてもこんな事に手を染めていなければ他の国の反政府組織から馬鹿にされかねないから、しょう事なしに手を染めているつぼくて、それにそれで金が入れば住民たちから納めさせる金が少なくて済むし第一地域内でのコカインの使用は厳禁し、使用者機問答無紬で隔離施設に放り込むと言う、中々真面目な反政府組織だった。それにケドリバス民族解放戦線を名乗っているからという訳でもあるまいが、このケドリバス地方を占拠してほとんど独立国家の呈をなして、さらに元々はアメリカ・インディオの土地だからナショナリズムに訴えるのも妙な話と言う事か、これ以上の地域の拡充も目指さない事で、住民からの収奪をなるべく少なく押さえる事で住民たちの支持を確かなものになっている。

そしてそのケドリバス民族解放戦線の存在は、大統領ウデマグラ・ヒザバグナにとつて必ずしも悪い事ばかりではない。そもそも大統領の任期が二期八年が限界なのに、こうして十五年も大統領が続けられているのは、そとえにこのケドリバス民族解放戦線が北部を占領してくれているおかげなので、下手に討伐して壊滅して国土を回復でもしようものならば即刻大統領を辞任しなければならなくなるのは目に見えている。という訳で非常事態宣言を出して戒厳令を出しているにもかかわらず、とは言えこんなものはここぞと言うときに出すから効果があるので、大統領の任期稼ぎに十年もだしっぱなしならそんな緊張感もあるものではなく、奇妙な共存関係が立派に成立していたのだ。ただし内陸国だから海

軍こそないものの陸軍空軍揃っていて、陸軍は総勢力四万余りを五個旅団に配備して、戦車や野砲も安いのが取り柄のロシエ製ではあるにしても相当数を取りそろえ、空軍だって軽便なCOIN機が四十機ばかりも装備していて、そもそも国内に反政府組織がいて一定地域を支配されていて、これを制圧しながらない軍隊などいるはずもなく、実際支配地域に相対するように二個旅団と戦車大隊二個が配備されていて、常に小競り合いを繰り返していて、時に特殊部隊たちをケドリバス民族解放戦線の支配地域に送り込んでテロなどを行っていて、そんな事をすれば当然ケドリバス民族解放戦線もテロに手を染めざるを得ず、或いはこれは逆だったかもしれないが、ともかく共存関係にありながらある程度の緊張関係にあったのだ。

さらにさすがに十五年も大統領選挙もやっていなくて実質的な独裁政権が続けば、政権は当然のように腐敗するもので、大統領とその取り巻きたちと一部の資本家や大地主、商人たちの癒着が目には余るようになり、ついに大規模な民主化運動が澎湃として沸き起こり、ついに大統領ウデマグラ・ヒザバグナを辞職に追い込んで軍人出身だが誠実で真面目な人物であるサガノ・ミソーニが臨時大統領に選出されて実に十六年ぶりの大統領選挙が行われることになったのだが、このサガノ・ミソーニを始めとする臨時政府の首班は余りに真面目過ぎて、実効支配している処だけではなくケドリバス民族解放戦線が実効支配しているケリトバス地方においても大統領選挙を実施したうえでの選出でなければ、真に選挙により選ばれた大統領とは言えないなどとてもない事を考えたのだ。考えただけではなく民族解放戦線に大統領選挙をケリトバス地方においても実施し、ケリトバス地方の住民も大統領に立候補できる旨を通告したのだ。そして臨時政府は完璧に公平で公正だから民族解放戦線が加わらない訳がないと考えたようだが、実効支配しているケドリバス民族解放戦線側からすれば自分たちの存在を否定したに等しい、とてもない話ではない。

臨時政府からすれば国民だから選挙に参加するのは当然だし、その主張が国民の支持を受けられれば司令官ルシカ・ルシモノカだってバガ・ブンナグルテの大統領になる事もできるのだから、不満などあるはずもないと勝手に判断してしまったが、ケドリバス民族解放戦線からしてみれば自分たちの実効支配を徹底的に否定されたに等しくて、それに大統領選挙なんかやったら人口十分の一のケドリバス地方の代表なんかが大統領になかなれるわけがないし、そもそもこの地域の統治のために司令官をやっているルシカ・ルシモノカにすればバガ・ブンナグルテの大統領なんかになったって仕方がないし、それなりの善政をしているだけに住民たちだって納得する訳がない。しかも特使でも派遣して説得でもしようと言うのならばともかく、いきなり通告と言うのもいかにも蔑ろにして既得権も端から無視しているようでケドリバス地方の住民たちの怒りを駆るのに十分な処に、バガ・ブンナグルテ政府も自分の非礼は棚に上げてケドリバス地方の反発にまた反発して陸軍は待ってましたとばかり二個旅団だった配備部隊を三個に増やし、これ見よがしに実弾演習を開始し、さらに特殊部隊による工作、実質テロだが、を活発化させたのだから、両者の関係はなおさらにこじれにこじれていた。

またこの動きを受けたケドリバス民族解放戦線の方も動きがあって司令官で実質的な首長であったルシカ・ルシモノカが何者かの銃弾によって倒れて、代わりに司令官で主張になったのが今まで副司令官であってガチガチの武闘派であり、前の亭主が政府軍によるテ

ロにより殺された事から異様な敵愾心を持ち、そんな兵士を捕えた際の残虐行為で知られ恐れられているバルダ・バルダランであり、さらに副司令官が白銀官兵衛と言う日本人であり、息子のキラシリアルとともになぜか残忍無残なサディストである事で知られていて、もちろん司令官が政府軍のいわばだまし討ちに遭ったのだから解放戦線も住民もその敵愾心はなおさらに激しく燃え盛っていて、いよいよ政府軍との本格的な対決が裂けられない状態となっていたが、そもそも住民からしてガバ・ブンナグルテ共和国の十分の一でしかないから兵力は精々二万で、重火器は決定的に不足しており、対空ミサイルなんか一発もなくて、しかもコカインの密輸による収入はあるものの住民の支持を得るために税金はできる限り低く抑えていたから、買うと言ってもその金がないという悲観的と言うより絶望的な状況にある中、駐バガ・ブンナグルテ共和国の日本大使の一人娘でドツクド国立大学二年でこの国の文化や風俗について学んでいる桑家茉莉と言う令嬢が、明らかにケドリバス民族解放戦線の仕業と分かるように誘拐されてしまったのだ。

そして珍しくガバ・ブンナグルテ政府の動きは迅速で、ただちにケドリバス民族解放戦線を非難すると同時にこの桑家茉莉と言う大使令嬢の救出に全力を挙げる旨声明が出されるのと同時に、日本政府に対してテロリストであるケドリバス民族解放戦線と安易な妥協や合意はしないように申し入れ、もちろんこれからいつ衝突するかも分からないケドリバス民族解放戦線に日本政府から潤沢な資金がてすきよえすることを恐れたに決まっている。ただしガバ・ブンナグルテ政府はああはいつでも具体的に何ができるといいうものでもなし、軍事侵攻する二も一か月や二か月の準備が必要だし、それにしても確実に救出できる保証はなし、むしろ逆になる可能性が強く、日本政府としては『ガバ・ブンナグルテ政府の申し出を尊重すると同時に救出に全力を挙げる。』という何とでも取れる声明を出すどどまって常識的な対応にとどまっている。

さらにはこの雪と言う大使の娘が端正な顔立ちで涼やかな目と長く艶やかな黒髪が印象的で、やや華やかさには欠けるもののそこがまた言うに言われぬ風情を感じさせる娘だったし、ドツクド国立大学二年と言う才媛でありこのガバ・ブンナグルテとかいうほとんどの日本人にとってはそれまで名前も聞いた事もなかった国の文化や風学ぼうと言う真面目な女子大生だったから大々的に報道されて、ワイドショーなどでも大きく取り上げられて国民の憂慮を報じるとともに、政府の考えられる対応や犯人側のこれからの行動予測など盛んに議論されたし、ネット上でも大いに盛り上がって真面目なものから不謹慎なものから妄想から様々に取り上げられていたが、ただしケドリバス民族解放戦線の対応は日本政府も、もちろんガバ・ブンナグルテ政府も、そしてそんなネット上の予想も全て完璧に裏切った、まさしくとんでもないものだったのだ。

二、最初はじわじわ裸に

私はサディストであるし、それもマゾとの馴れ合いプレイなどに興味はなくて一方的に責め苛み辱めるのが好きだから、真性のサディストを自認している。もちろん日常生活においてはそんな性癖など押し隠して、とういかそんな性癖など発揮する機会など社会生活上ある訳ないから結果的に隠してただけだと思いつながら暮らしている、普通のどこにでもいるサディストの一人に過ぎない。ただしガバ・ブナグルテ共和国の日本大使の令嬢が誘拐されている県は当然知っているし、並々ならぬ関心も示してよからぬ妄想にふけて若干の罪悪感に浸ったりする、その点でもやっぱり普通のサディストと言わざるを得ない。そんな私に唐突に『サルジニア観光協会』という差出人から一枚のCDが送られてきたのだ。今の世の中にいささか原始的すぎないかとも思ったが、怪し気なメールが跳梁跋扈している世の中に、突然こんな送信先から動画が送られてきた処で、まず絶対に見ないから案外これが正解かもしれないと思いつながら同封されている封書を読むと如何にも観光協会らしいらしい適当な美辞麗句が散りばめられている中に、必ず一人で視聴することを推奨する旨記載されており、この時点で何かを感じ取ったものだから早々に自室にCDを手引き上げて、一応はウイルスチェックたせけてパソコンで視聴したのだが、その内容はまさしくとんでもないものだった。

いきなり私は目を奪われていた。と言うのはテレビで散々その姿を見ている河野茉莉が、その両腕を背後に回されて手錠を嵌められて、その倉庫のようなただっ広くて殺風景な部屋の真ん中に逆様に吊るされていたのだから、それは視線も奪われる。もちろん状況など全く理解できないに決まっている、しかもお嬢様育ちであまり気の強くないに違いない、茉莉は当然無残に泣きじゃくりながら、

「どうしてなの：どうして：ああうっ：ああっ：ヒイヒイヒイッ：あなたたちどうしてこんな事を：お願い許して下さい：ああうっ：アヒイヒイヒイッ：ヒイヒイヒイッ：苦しいの：お願い降ろして下さい：苦しいーっ。」

と必死になって哀願を繰り返していた。履いていたパンプスは脱げてしまつて白のソックスも脱がされて裸足の足首には一つにまとめてロープが巻かれているが、しかし肌が傷つかないようそれに白い布が巻かれているが、しかしそんな事も今の彼女には何の気休めにもならないはずだ。こうして拉致された時に来たいかにも初々しい女子大生らしい白のシルクのブラウスもベージュのパンツもそのままだが、こんなお嬢様にとつてはこうして縛られて逆様に吊るされているのは恐ろしい以上に惨めで恥ずかしくて、さらに当然逆さ吊りの責め苦はいよいよ残酷だし、テレビで散々放映された美しく端正な顔は無残に歪み強張っている上長く艶やかなストレートヘアは下に垂れその美しい顔は徐々に紅潮し始めている。しかも彼女を取り巻いているのは三十人ほどのいかにも柄が悪そうでおぞましい雰囲気芬々とさせていて、もちろんお嬢様育ちの茉莉が付き合ったことなどあるはずもない明らかに中南米系の男女で、その中に明らかな日本人もいるのだが、その視線は怪しく激しくぎらついている。さらにその部屋には天井の照明に照らされて数々の、おぞましいもののサディストにはおなじみの様々な器具がいくつも並んでいるし、壁際には何種類もの鞭や小さな熊手のようなもの、焼印らしいものがかけられているラックがある何とも陰惨な雰囲気が横溢しているのだから、それが恐ろしくない道理がない。

しかも茉梨はきつと自分を害そうとしているものの存在すらも想像することもできそうにないお嬢様で、それは恐ろしい上に混乱しきっていて、何で寝大学からの帰途数人の男に突然頭から大きな凶多袋のようなものをかぶせられて誘拐されたと言うから、きつと袋の中から引き出されるなりこんな姿に吊るされてしまつて、拉致された事からして本当にあつた事とはまだ思えずにいるのかもしれなくてその姿はいきなり刺激的だ。しかも当然のことながらこうして逆さ吊りにされている責め苦もやはり凄まじいし、その顔は益々紅潮しその姿をさらに無残に、刺激的にしている。そしてでっぷりと太つていて何ともおぞましいものを感じさせる残忍さと強欲さと好色そうな雰囲気をも併せ持っている中年女、いうまでもなくこの女の顔もテレビに散々移されているケドリバス民族解放戦線の司令官でケリトバス地方の実質的な支配者バルダ・バルダランだ、はそんな茉梨にニヤリと笑いかけるなり、一層激しくその目と顔をぎらつかせている仲間たちに振り返るなり、

「どうだい、みんな。こうしてみれば見るだけ素敵なお嬢様じゃないか。これならばいたぶり甲斐があるし、それに何をしたつて思うがままと言うのだから堪らないし、残忍無残にいたぶつて苛み抜かなければ私たちが馬鹿にされるよ。」

と言うと傍らのいかにも陰険そうな中々美男に日本人の中年男、この男の顔も散々テレビ画面で見ている白銀官兵衛だ、が視線をこの娘に向けたままやはり何ともおぞましい笑みを浮かべて、

二十、最後の動画は予期した以上

いくら背徳的と罵られようが構う事はないと言う心境だったし、自己嫌悪も減ったくれもあるものと思つて自身の鬼畜であることを強く認識しながらも、私は次の、最後のものとなるに違いない動画の到着を持ち漕がれていた。あんな事があつてガバ・ブンナグルテ共和国の政治状況が一気に沈静化して、きつとその事件そのものが余りに背徳的だったことに加えて、今後の展開を期待する事で自身の背徳性も少なからず認識させられてしまったから、ノーマルな感性の持ち主にとっては一瞬でも早く忘れてしまいたかった次系だったに違いない、あたかもそんな事などなかったような雰囲気になるに従い、そんなものが送られる雰囲気はなくなつてきていて、それに伴い私の焦燥感はいよいよ高まつていた。もしや自分の処だけ送られてきていないのではと動画検索は今まで以上に必死になり、情報収集には務めた挙句に、十万円支払つて全く粗雑で処刑シーンは最後は見るからにやらせの絞首刑にしてしまう作り物を購入してそんな自分に腹を立てたりして、半年尼真理が経過し、そんな私がそろそろ諦めかけてきたまさにそんなタイミングを見計らう様に、「オーストリアクリスマスにおけるクランプスとな秋田まはげ行事の相似性」なる動画が届いたのだ。

桑家茉梨はドムドムとダムダムにその両腕をとられてあの得体のしれない街の差壺とした広場で、集まつている有象無象の老若男女の中を、その激しく熱い視線を浴びながら連行される時点で、その異様で陰惨な興奮に包まれているその広場の雰囲気は尋常なものではない事に気づいていたに違いない。さらにここまで徹底的に苛まれていれば、当然次に来るのは処刑以外にあり得ない事も理解していたに違いない、この哀れな日本人の女子大生その時点で死に物狂いでその体をのたうち狂わせながら、

「お願い助けて下さい：殺さないで：死にたくない：アヒキヤアアアッ：キヤアアアッ：アヒイイイイッ：お願い助けて：私：私何でもします：本当です：ご主人様お許しを：ヒイイイイッ：うあうっ：ああう：死ぬなんていやあーっ。」

といよいよ一層無残な声をひたすら張り上げて泣き狂い、哀願を繰り返していた。しかしその広場の知友王のステージの上で待ち構えているバルダや官兵衛、キラシリアルにマガンと言った面々はそんな茉梨の抵抗が激しければ激しいだけ、哀れならば哀れなだけ刺激的なののに決まつていて、なおさらその嗜虐心をあらわにした歓喜と興奮にその目と顔をぎらつかせている。一方広場にひしめいている街の有象無象や解放戦線、もはやそれが本当に解放戦線なのかも定かではなくなっているが、の者たちはなおさら応えられないように、なんだか少しでも前に出ようとひしめきながら、

「へへへっ、なんだか今度の奴はえらくしおらしいと言うか、白々しい事をわめいているな。」

「それなしでも喚いている顔だつてやっぱり可愛いが、そこは日本大使の一人娘の茉梨お嬢様だからな。しかし美人の上にあんな親を持ったばかりに可哀想に。」

「とは言えここに連行された時にはあんなにきれいな肌をしたのにこの有様とはひと際無残で、我ながら随分と苛んだものだ。」

当然まだ二十歳の女子大生の彼女にとつて、これから処刑されるというだけでもあまりあるのに、こんなおぞましい変態たちにより、その目をたつぷりと楽しませながら殺される

と思うといよいよ恐ろしくて、悲しくて口惜しくて、この時点で茉梨の胸は引き裂かれそうになっている。それに茉梨にとつては自身が苛まれる姿や辱められる姿、もちろんこうして戮り殺しにされる姿までもがネットに公開されてしまつて、やつぱりおぞましい変態サディストたちの慰み者にされてしまうと思えばなおさらに惨めで悲しくて、さらに先日危うくギリチンで首を切断されかかった時の記憶もあまりに惨烈で、さらにこの悪魔たちはあんなものが比較にならない恐ろしい方法で処刑してやると散々吹き込んでいるのだから、その恐怖だけで気が狂つてしまふそう。ドムドムとダムダムに引きずられながら連行される茉梨は、何とか抗おうと死に物狂いでその体を振りながら、

「お願い殺さないで：何でも：何でもします：ヒヒイイイイッ：ヒヒイイイイッ：あひうっ：お願い助けてえーっ：本当だから助けて：キヒキヤアアアッ：ああうっ：ご主人様お許しを：ご主人様助けてえーっ。」

といよいよ一層の激しさで泣き狂いながら訴えていて、もちろん見ている者たちをなおさらに喜ばせずにはおかない。

そして当然の事ながらこうして連行しているドムドムとダムダムだつて、この中でも殊更凶暴なサディストなのは分かつていて、そんな茉梨の様子になおさらにそそれなない道理がない。そんな茉梨の姿に一層面白そうに、

「だからよ。いくら美人のお嬢様だつて、☆ぬやら蛇やはもちろんの事、ポニ☆やらブ☆にまでしつかり前後を貪られて、しかもあんなに激しく反応した奴なんかの体になんぞ、そもそも興味なんてあるものか。」

「満更そうとばかりもいえないが、ただしこういうものはあんまり堪能しきつてからじやなくつて、まだちよつと勿体無いといったタイミングで処刑するから面白い。そして今がそのタイミングなんだ。」

「それに奴隷としてこき使うと言つても手足がこの有様ではよ。」

「それから口での愛撫は相変わらずへたくそだし、ま、処刑してその様を楽しむより使い道がないと思つても間違いないし。」

などと声をかけながらようやくステージへと到着しその上へと担ぎ上げると、そのには既に一本の磔柱が地面に横たえられている。

ただしそれはただの磔柱ではなくつて下に横木を取り付けているが下の横木が異様に長いし、しかも上と下の横木の感覚も異様に狭く、一言で言えばいわゆるロー×十字に一番近い。とだけではさすがに不親切と言うものであつさり言えば『キ』の字の下の横棒を長くしてまつぐにしたいくらいなものだ。もちろんそれには何ともおぞましい雰囲気横溢していて、茉梨はその美しい顔を残りに強張らせるが、彼女の到着を待ち構えていた官兵衛たちはそんな生贄の哀れな有様にいよいよ面白そうにその顔や目を輝かせている。そして茉梨がいよいよ必死で哀願しようとするのを機先を制するように、

「ふふふ、茉梨、お前は日本大使の令嬢でありながら自ら淫乱奴隷に成り下がつて、色んなもの相手に淫らに派手に泣き喚いて泣き叫んで思い切り哀れで浅ましい姿をさらしてきたからな。そんなにみつともない姿をさらしたいのならば、もつともつとさらさせてやるでしょう。」

「と言う訳でこいつの体をさっさと磔にしてやれ。もちろん縛り付け方は分かつてな。」

まずバルダが、続いて官兵衛がいよいよ一層面白そうに言い放つてくると、解放戦線の者たちに容赦はない。下つ端たちにドムドムやダムダムたちも加わって、なお身を振って抗おうとする茉梨をその変則的な十字架の上に横たえるなり、その体をその礎柱に縛り付けていき、もちろん茉梨はいよいよ堪らない。その唇が戦慄いたかと思うと、次の瞬間

「ギヒキヤアアアアッ：ヒイイイイッ：アヒキイイイッ：ああうっ：お願い許して：ご主人様：官兵衛様お願いです：アヒキヒイイイッ：ひあああ：ああう：マガン様お許し下さい：命：命だけは助けてえーっ。」

と一層無残な声がほとばしって、体もまた最後の力を振り絞るようにして苦悶する。

しかしもちろんその手下たちは、もちろんドムドムもダムダムも、茉梨がどんなに泣こうが喚こうが悶えようが、容赦はないどころか一層面白そうだ。その両腕は左右に広げてその手首を縛り付けられてしまい、さらに胴体は胸の前で交差するように荒縄で縛り付けられて、もちろんこんな姿で縛り殺されなければならないのかと思うとその恐怖はさらに凄まじいが、しかしこの連中にとつての眼目はこれからなのだ。

「さて、それではそ恥ずかしいところを目一杯さらけ出すんだ。なに、今までだってそんなに派手にさらけ出してきて、ブ☆やポニ☆相手に獅子奮迅の働きを見せたお前にとつては、こつちが思うほどには大した事ではないだろう。」

「ただしこれほどの美人がこんな姿をさらしたならばそれは見た者たちは大喜びをするのに決まっている。」

「ましてこんなお嬢様がこんなみつともない姿で縛り殺しになると思えば：、ひふふ、ひへへっ、それだけで何だか堪らなくなってきたじゃないか。」

そんな言葉とともにその両足は下の横木に沿うように真横に広げられて縛り付けられてしまい、もちろんその股間にはこのまま引き裂かれてしまいそんな激痛が走るし、さらにこんなさらけ出されたと言っても、さらにあんなに苛烈に辱められていると言っても、お嬢様育ちの茉梨にとつては、こんなにも多くの人前にその恥部をこれでもかとかばかりに広げなければならぬ羞恥と屈辱はやっぱり耐えがたいのに決まっている。

「グギヒキヤアアアアッ：キヒヤアアアッ：いやです：いやあーっ：お願い許して：アヒキイイイッ：ひああうっ：こんな：こんな事あんまりです：ヒキイエエーエッ：ヒイイイッ：ご主人様許して：こんな事いやあーっ。」

もちろん茉梨はいよいよ一層無残な声をひたすら張り上げて泣き狂い哀願するが、しかしその両足はたちまちその異様に長かった横木に綺麗に左右一直線に広げて縛り付けられてしまい、そしてそれはおもむろにそのステージの上へと立てられて、もちろんそれと同時に余りに手足まで碎かれて余りに無残に変わり果てしまっている、しかしそれでも彼女将来の美しさや淑やかさ、気品の様なものは相変わらず損なわれてはいな裸身が、そしてそれだけになおさらに無残で哀れで刺激的な裸身が一気に無残にさらけ出されてしまつて、しかもそれは両足を真横に広げてその恥部と排泄口をこれでもかとかばかりにさらしている惨めさだったのだから、こんな姿だって散々目にしているはずの解放戦線的面々やらのこの街の有象無象の間からさえ大きなききやうなものが起こる。もちろん激しく熱い視線が一気に集中して、一方の茉梨からすればその裸身をこんなにも惨めにさらすのだから、そしてこんな姿で縛り殺しにしなければならないのだから、その思いは胸が張り裂けてしまいそんな激しさと残酷さだったに違いない。茉梨はがつくりとうな垂れ、固く閉じた目から涙を次々に溢れさせながら、

「あううっ…うああ…ヒギヒイイイッ…お願い見ないで…殺さないで…ひうぐっ…こんな事あんまりです…ひぐあ…死にたくない…キヒイイイイッ…ヒイイイイッ…お願い殺さないで…どうして私がこんな目に…。」
とさらに無残な声を振り絞るようにして訴えている。

しかしこんなにも美しい二十歳の日本人の真正正銘のお嬢様がこんなにも無残で哀れな姿で縛り付けられていて、そんな事を言われたところで見ずにおくなどありえないばかりか、その言葉に煽られたように視線はいよいよ一層の激しさで、そんな茉梨の余りに無残な裸身へと集中し、それと分かる茉梨は益々一層無残に泣きじゃくる。そしてバルダはいよいよ面白そうだ。

「ふふふ、どうやら茉梨は、変態で淫乱の奴隷の分際でどうして自分がこんな目にあわなければならぬのか分からないらしい。一つ分かるようにしてやろう。」

と言うと、官兵衛に目配せするとこの頼りにされているのか良く分からないサブ・リーダーはにやりと笑うなり、いささか仰々しい、そして見るのが日本人と言う事だつて意識したに違いない、手にしていた巻紙を広げるなり麗々しくかつ勿体ぶった声で、
「これより茉梨・マリアージュを処刑するその理由を読み上げるから、包んで承るよう。」

とまず事前に言い放っておいてから、

「一つ、初めて処女を失いし時も、また様々な生き物と交わりたる時も浅ましくよがり狂つて淫らな姿をさらくまくったのが一つ。」

さらにこれが撮影されて世界に視聴されるのも構わず敢えて淫らな姿をさらして、視聴者をたぶらかしたことが一つ。

もちろんこんなに淫乱で変態でありながら、今まで清楚で淑やかな風を装って男たちをたぶらかしていたことが一つ。

まあ他にもいろいろ取り上げられない事はないけれども、いくら何でも牽強付会にすぎることになりそうだし、こんな事をしていたらいつまでも処刑が始まらない。これくらいにするとしよう。」

と次々に読み上げていって、一つ読み上げる事にその広場の熱気は益々激しさを増して、茉梨は最初の間こそ何とか抗おうとして悲痛な声を張り上げていたが、ついに諦めたようになつてとうな垂れていよいよ激しく泣きじゃくるばかりになつてしまふ。

そして官兵衛も余程嗜虐心を煽られているに違いない、そんな茉梨のいよいよ無残で哀れな姿にバルダ以上におぞましく残忍な視線を這わせながら、いよいよ激しくたぎったような声で、

「以上の罪はまさに万死に値するによつて、桑家茉梨はその淫乱で散々に食られた処をこうして画像を通じて世界にさらして見せしめとしながら、存分に鬻り殺しにするものとする。なんちゃってな。」

などと言い放つなり、いよいよ面白そうでそれだけ残忍な視線を浴びせていた解放戦線の者たちも街の有象無象たちも派手に喝采して、その広場の鬼畜な雰囲気をおさらに盛り上げていて、茉梨はまさにその秘すべきところをこれ以上できない程に無残にさらしてひたすら哀れに泣き狂いながら、

「アグウキヤアアアアッ…あうあう…ぐうあつ…お願い殺さないで…ご主人様お許しを…何でもします…ヒイイイイッ…ヒイイイイッ…ぐあひあ…だから助けて…お願い殺さないで…ウアキヤアアアアッ…うあうっ…ひきあつ…。」

と泣き狂い絶叫と哀願を繰り返し、その体をいよいよ一層の激しさで戦慄かせて泣き狂うばかりだ。もちろんこんな姿で戮り殺しにされる恐怖と屈辱、悔しさや絶望、悲哀はなおさらに凄絶だが、さつきも誰かが言っていた通りこんな事をしていれば、処刑などいつまでたつても始まりはしない。そしてそれは早速始められなければならない。

「グギャウギャアアアアアアッ：ぐがあう：ヒギイイイイッ：グギキイイイイッ：ギキヤギャアアアアアッ：あぐうっ：お願い助けて：痛いよーっ：痛いーっ：ぐがあ：お願いやめてえーっ：ギヒギキヤアアアアッ：」

無残に磔にされている茉梨はいきなり無残な声を張り上げて泣き狂って絶叫し哀願し、さらにその無理やり土の字型に磔られている体を激しく戦慄かせていた。何しろ茉梨はその手足に何本もの五寸釘を槌音を立てて次々に打ち込まれていたのだから、そしてそれはたちまちその皮膚を、肉を貫いてその体を磔柱に固定しているのだから、その激痛の凄まじさはいきなり地獄で彼女がこんなになってしまうのも無理からぬものがある。それでも今の処は骨格にあたるところは外されているようだが、その手足をよりにもよってこんなにも残酷に、かつ嚴重にその磔柱に固定されていく激痛には凄まじいものがあるに決まっているし、釘の数が増えれば増えるだけその激痛が凄絶さを増す。もちろん釘を打っているのは例によって解放戦線の男たちで、中にしっかりとあのルークも含まれているのだがその目はいよいよ一層の激しさでぎらついて、その左右に広げられている四肢に五寸釘を手にしたハンマーにより乾いた音を立てて金槌で打ち込みながら、

「へへへっ、縛り付けた時にはこのままこれで納得するのかと物足りないどころではないくら位に思ったが、まさかそんな事などある訳がなかったんだな。」

「そりゃそうだ。あんなに鬼畜な事をやっておきながらそれで終わってたまるものか。」

「そうだな、どうせこれだけでは済まないって事は、これから一体何が起こるか分からないったことだから一層ぞくぞくしてくる。」

そしてそんな自分たちの言葉になおさらに煽られたようにいよいよ激しく釘を打ち込んでいって、もちろんたかが五寸釘でその手足を次々に釘付けにされていく茉梨の激痛と恐怖はいよいよ凄まじい。

「アギヒギヤアアアアアアッ：ヒギイイイイッ：あがおっ：グアウギャアアアアアッ：ぐがあう：痛いよーっ：官兵衛：官兵衛様助けて：ご主人様：アギキイエエーエッ：ギウギャアアアアアッ：お願い助けて：殺さないで：死ぬのはいやあーっ。」

なおさら一層無残な声をひたすら張り上げて泣き狂い、その体を戦慄かせながらさらに容赦なくぎを打ち込まれていて、そして当然前の人間が終われば即座に次の者が後を埋めて、他の者たちがなくぎを打ち込んでいるのに合わせて釘を打ち込んでいて、もちろん打樋む者たちはタイミングがずれているから、この日本人の女子大生に絶えずその四肢に釘を打ち込まれる悪夢のような激痛と恐怖にのたうたせながら、その体を磔柱に釘付けにしていく。当然茉梨はなおさら地獄に決まっいて、いよいよ無残な声を張り上げて、

「アグウギャアアアアアアッ：ヒアギイエエーエッ：ウグギャアアアアアッ：あぐうっ：ヒグキヤアアアアアッ：ぐあうっ：お願い助けて：痛いーっ：痛いーっ：ウアギイイイイッ：死にたくない：あうあう：お願い殺さないでえーっ。」

と泣き狂って絶叫と哀願を繰り返し、全身をなおさら激しく戦慄かせ。もちろんそれに連れて手下たちの興奮はなおさらに掻き立てられていくが、しかし処刑などまだ始まったば

かりなのさらされる無残なさまに、バルダたち解放戦線の者たち。そして私の興奮はおさらに掻き立てられていく。

時間表示では二十分余りが経過し、茉梨の四肢は各々十本余りの五寸釘に釘付けにされてしまっていた。もちろんそれはそれでいよいよ凄まじい激痛に違いなく、茉梨はいよいよ一層無残な声をひたすら振り絞るようにして、

「グアウギアアアアアッ：ヒイイイイッ：ヒヤウギイイイイッ：痛いーっ：ご主人様お許しを：お願い助けて：うがあっ：ギヒキイエエーエッ：ギヤキヒイイイッ：マガン様：官兵衛様お願い許してえーっ。」

とさらに一層無残な声をひたすら振り絞るようにして泣き狂い、絶叫と哀願を繰り返している。余りの責め苦と恐怖に打ちのめされてしまったのかその首はがつくりとうな垂れているが、両手の指はひたすら空を掻き爪っており、そのことがその有様を益々一層無残にしているのはいうまでもないが、しかし五寸釘はしつかりその手のひらも貫いて鮮血を滴らせ、その有様が益々無残なのは言うまでもない。当然見ている解放戦線や街の老若男女、そして私の目はいよいよ激しくぎらついているが、この人の顔をした悪魔たちにしてみればこの程度では小手調べに過ぎなかったに違いない。

「ふふふ、随分と釘付けになってしまったからには縛っているロープなんか意味ないね。さっさと取り除いてやった方が見栄えが良いし、茉梨だってそっちの方が嬉しいだろうし。」

マガンがいかにも面白そうにそんな事を言うと、手下たちも残忍な興奮と歓喜に憑かれたようにその目と顔をぎらつかせてその体を縛り上げていたロープを全て、しかも同時に解いてしまったその瞬間から、茉梨はその全身を貫いている五寸釘だけで体重を支えなければならなくて、同時に全身には一層恐ろしい激痛が貫いてくるはずだ。

ただし茉梨は一瞬何が起こったのかも分からないようにその眼を無残に大きく見開いていたが、すぐに一層無残で恐ろしい声を張り上げて、

「グギアギイイイイッ：ヒキアアアアアッ：グキアアアアアッ：ひぎあっ：痛いーっ：お願い助けて：ぐげえう：助けて下さい：ヒヤギイエエーエッ：グギヒイイイイッ：官兵衛様：マガン様お願い助けてえーっ。」

と泣き狂い、絶叫しなければならない。ただしもちろん今までののはほんの小手調べで、本番はむしろこれからなのだ。マガンはなおさらに面白そうに、